

<大阪府指定文化財 有形文化財（絵画）>

名 称	ひろかわでら けんぼんちやくしよくしやうとくだいしぞう 弘川寺 絹本著色聖徳太子像
員 数	1 幅
所在地	大阪府大阪市天王寺区茶臼山町 1-82 （大阪市立美術館）
所有者	宗教法人 弘川寺
年 代	14 世紀（南北朝時代）

説 明

○概要

本図は真言宗に属する龍池山弘川寺（大阪府南河内郡河南町弘川）に伝来する聖徳太子の絵像である。その姿は鎌倉時代後期以降、16 歳の太子を表した孝養像として解釈されるものである。

縦 143.3cm、横 70.2cm の大きな画面を有し、像主を覆う幅の中絹（約 43cm）に左右絹（約 13cm）を継いだ 3 幅 1 鋪とする。本図には、像主の聖徳太子像において同一の像容を表す類例が複数現存している。これらは共通した祖本から制作されたものと考えられるが、本図はそのうち背景に器物を描く点において、特に兵庫県・香雪美術館本（重要文化財。以下、香雪本）との共通点がみられる。画面には聖徳太子のほか、幔幕や背屏、框座、褥などの周辺器物の描写が丁寧に施され、同系の図像の中でも精緻な表現をとる優品として評価できる。また、こうした仏画としての評価のほか、これらの器物のうち背屏に描かれる水墨山水図は、画中画ながらも日本における水墨画の初期作例として貴重である。その制作年代は図像の表現様式の特徴、および類例との比較や絹目の検討から、14 世紀前半、南北朝時代に入ると考えられる。

○聖徳太子像の図様について

画面中央の聖徳太子像は頭部正中で髪を左右に振り分け、美豆良を結う。眉根を吊り上げ、目を鋭く見開き口を固く結ぶ。右手で柄香炉を執り、左手を持物に添える。內衣、袍、袈裟、横被、裳を着す。袈裟を偏袒右肩に着し、左脇にて花形の金具で吊り下げ、袈裟の末端を左肘に掛ける。横被は右肘の下から右袖を包むように巡り、衣縁を左手第 5 指に掛ける。沓を履き、框座の上で右を向いて直立する。

彩色は肉身白色とし、着衣の各所に文様を配す。主な彩色と文様を挙げると、丹具地の袍に宝相華団花文を朱色で描き、衣文線に朱の暈を引く。袈裟の田相部は青と緑の入り混じった地色とし、内区は現状剥落のため明確な文様が確認できないが、全体に刺し子状の文様が白色系の顔料で施され、緑青で遠山風の表現を施す。条葉部は金泥線 1 条、褐色線 2 条、緑帯 1 条

で区切り、茶褐色地に墨線で雲文を描く。条葉部と雲文の輪郭内側には細い金泥線を添える。裏地は緑の無地とする。横被は黄土地に宝相華団花文を墨と金泥で描き、衣縁には墨線で宝相華団花文を連ねる。裏地は白の無地とする。裳は朱地とし、下方の裾の縁に金泥線で区画をもうけ、内側に雲龍文を描く。裳の打ち合わせに沿って下方縁と同じ渦文帯を描く。裏地は白の無地とする。沓は全体を金泥で表す。

○周辺器物の図様について

本図の特徴として、像主である聖徳太子の周辺に荘厳具などの器物が配され、殿舎の中にあるような表現をとることが挙げられる。

幔幕は画面上方で左右の巻き上げ紐により中央をたくし上げる。幕の布地は丹具地で、地文を白・黄土・群青からなる宝相華を配した唐草文とし、主文に団龍文を配す。団龍文は朱地のうちに墨で龍を表し、その輪郭を白線でなぞる。巻き上げ紐表を群青地、裏を丹具地として、縁に二条の金泥の帯を配し、末端や垂下部に飾金具を表す。

背屏は太子を囲むようにして、正面を除いた3方向に立てる。縁を金泥線で囲った黒枠で組まれ、随所に飾金具を施す。枠には上から板壁、連子窓、山水図壁、獅子図壁をはめこむ。板壁は白色無地で縁を青とする。連子窓は立板を緑、枠を朱色とする。獅子図壁は内側を金泥、外側を緑で囲み、内の獅子と雲は現状褐色と緑を織り交ぜた色で表わされ、輪郭線の内側や獅子の爪牙は白で表わされる。

褥は青地で、地文を緑の雲文とし、雲の輪郭線の内側を金泥でなぞる。主文は黒地に金泥で鳳凰を描く鳳凰円文とし、縁は金泥の帯で区切り、青色地に牡丹唐草文を描く。唐草は緑色で輪郭に金泥を施す。牡丹の色は現状不明である。

框座は背屏の枠と同じ黒として、金泥で飾金具を表す。四隅には青、白、金を重ねた猫足を配す。框座は青と黄土を交互に配した石畳の上に安置され、画面左奥の石畳の上には白い塀が配される。塀の上には下框、格狭間、上框、斗束、架木が表された欄干状の構造物が置かれる。

○山水図の図様について

背屏に描かれる水墨山水図は画面の周囲が青い枠で囲まれる。太子左側の画面は構図上視認できないが、右側と後方の背屏にはそれぞれ異なる図様が描かれることが確認できる⁽¹⁾。

太子右側の山水図は、中央に1本の老木が生える様子を描く。画面左側は少し空間を開け、奥に向かって川が伸びていき、遠景には微かに山と樹木が描かれる。太子後方の山水図では、太子の頭上に遠景の岩山と樹木が描かれる。樹木は画面の下方に続き、そのもとに1頭の水牛と童子、そしてその右にはかがみ込んで植物を刈る様子の童子が描かれる。

○墨書銘と付属品および伝来について

本図の墨書銘および付属品については以下の通り⁽²⁾。

(本紙左側)

「印(判読不能)」「印(「幸秀」)」

(旧表具裏)

「延寶五年<丙巳>閏極月廿二日／石川若狹守源總良公表具寄進之」

(旧保存箱蓋表)

「聖徳太子 弘川寺」

(旧保存箱蓋裏)

「宥寛 (印「宥寛」) 「御表具師中尾宗言造 (印「中尾」)」

(折紙包紙)

「鑑定」

(折紙)

「聖徳太子之尊像／土佐古将監真筆／無疑者也／法眼永真 (印「安信」) ／<午>七月二日」

本紙に捺される印は2顆確認できるが、うち上方の印は現状判読ができなくなっている。下方の印は「幸秀」とあり、本図の筆者と考えられる。鎌倉時代から南北朝時代の絵仏師のうちには「幸」字を有する人物が南都で活躍した例が複数知られており⁽³⁾、うち文永8年(1271)に幸守が描いた唐招提寺「行基菩薩像」を後方の背屏には水墨山水図が表され、また豊かな彩色や強弱をつけた描線が本図とも共通する。そのため、本図に名を残す幸秀もこうした南都系絵仏師の一員であった可能性がある。

本図の江戸時代以前の伝来は不明であるが、現存する表具に記される墨書から、延宝5年(1677)には既に弘川寺へ渡っていることが理解できる。表具の寄進者は伊勢神戸藩2代藩主の石川総良^{いしかわふさよし}のことである⁽⁴⁾。弘川寺の所在した河内国石川郡は、伊勢神戸藩が万治3年(1660)に大坂定番となった際に、古市郡と共に同藩の領地に加えられた。なお、弘川寺所蔵の絹本著色十王眷属亡魂集会図(南宋時代制作。寺伝「地藏十王図」)の表具および保存箱の蓋裏には、それぞれ石川総良と表具師中尾宗言^{なかおそうごん}について記した同一の文言が確認され、同時に修理されたことがわかる。そのため、これらの2幅からは、当代の藩主であった石川総良が藩領内寺社に対して保護整備の手を加えていたことが理解でき、本図は近世河内国の地域史研究の上でも評価される。

付属する折紙は狩野永真安信の手による添状である。石川総良と同じ家系である亀山藩の石川家に伝来する明代制作・伝趙中穆筆^{ちようちゅうぼく}「山水図」(個人蔵。亀山市歴史博物館寄託)は、その箱蓋裏の墨書に「永真添状一通」「御表具師中尾宗言(印)」とあることが知られる⁽⁵⁾。鑑定者と表具師が一致し、所在地の藩主に共通点が見いだせることから、近世における本図の伝来背景を検討し得る情報として注目される。

○本図の制作年代と聖徳太子像における位置づけについて

聖徳太子の肖像は多様な像容で表されることが知られる。衣冠束帯を著し笏を執る摂政像や、幼児の姿で合掌する南無仏太子像、冕冠と袈裟を著して経を説く勝鬘経講讚像^{しょうまんぎょうこうざん}など、中世以降はこれらの像容を聖徳太子の伝記に結びつけて解釈する説がみえる。このうち、本図のように美豆良を結び、柄香炉を執る童形の姿は、鎌倉時代後期頃より16歳の太子を表した孝養像であると解釈される⁽⁶⁾。

数ある孝養像の作例のうち、本図には着衣の文様などの細部を含め同一の像容を表す類例が複数現存することが知られる。鎌倉時代後期から末期にかけて制作されたと思われる作例に

は、聖徳太子と褥のみを描く京都府・仁和寺本、背景を描かず聖徳太子のみを表す三重県・四天王寺本と京都府・西本願寺本、そして本図と同様に背景の幔幕、背屏、框座、褥などを描く香雪本が挙げられ、いずれも聖徳太子像の姿勢や服制、文様、衣文線まで共通する。そのため、これらは共通した祖本から制作されたもので、またこうした聖徳太子の図様が鎌倉時代後期に流布していたと考えられる。

以上の諸本の制作年代の前後関係を検討すると⁽⁷⁾、いずれの作例も裳裾に波状の衣文線を描くことが踏襲されており、祖本が宋画の影響のもとに制作されたことがうかがえる。仁和寺本は衣文線の豊かな量感や面部の僅かな立体感など、細部において優れた描写がみえることから、このうちでは最古の作例にあたるものと考えられ、他作例は仁和寺本より僅かに時代が下るものと考えられる。

本図と香雪本は像主の周辺に煌びやかな荘厳具を表していることが特徴であり、仁和寺本等の作例より礼拝画的な性格が強いとされている⁽⁸⁾。こうした背景の描写は童形の聖徳太子像の展開や意義を検討するうえで注目される。幔幕を有する殿舎は神像彫刻の安置形式との共通性がみえるほか、背屏の表現は浄土真宗系の垂髪孝養像にも多用されること、ほか石畳と3曲の水墨画付背屏の描写は南宋の祖師像と関係する可能性が提起されている⁽⁹⁾。

本図と香雪本を比較すると、全体構図から細部の装飾の図様まで多くの共通点がみられる一方で、本図の表現は総じてより形式化・簡素化する傾向がみられる。様式面では、裳裾や左肘に掛かる袈裟の末端の衣文に顕著に表れるように、描線の肥瘦や起伏においてより落ち着きが見える。細部の描き込みにおいては、香雪本が太子像の横被や裳に多くの文様を表し、背屏の板壁や枠に金泥で装飾を描くことに対して、本図ではこれらを省略している。

背屏の水墨山水図については、山中に老木を描き、水牛や芦を刈る童子など概ねの画題は一致する一方で、構図や具体的な図様に相違がみられる。特にその表現においては、香雪本の墨の濃淡の階調により繊細な色彩感覚がみられ、本図の時代の下降を思わせる。

こうした細部の比較から、本図の制作年代は鎌倉時代末期頃制作とされる香雪本より更に下り、14世紀半ば、南北朝時代に入る頃に制作されたと判断される。絹目について確認すると、経緯は双方ともに2本充てで、緯糸が経糸に比べ太く、間隙度が大きいといった特徴が挙げられる。こうした絹目の特徴は本図を南北朝期の制作とする見方と矛盾はない⁽¹⁰⁾。仁和寺本や香雪本といった先行作例と比較すると落ち着きが見られるものの、肥瘦の強い描線や繊細な文様の描写も南北朝時代頃の作とみて齟齬はない。特に、香雪本で僅かに切り詰められた画面の左右が残存していることや、優れた保存状態による高い視認性は、同系統の作例のうち本図を位置づけるうえで評価される点である。詳細な背景と周辺器物の描写は、転写の元となった祖本の姿をうかがい知れる数少ない遺例であり、童形の聖徳太子像の展開や、こうした像容の聖徳太子像が意図していた表現や思想背景を検討するうえで貴重である。また、背屏の水墨山水画は制作当初より描き込まれているものと認められ、補筆もみられないことから、日本における初期の水墨画の作例としても注目に値する。

○評価

以上により、本図はいわゆる孝養像とされる聖徳太子像のうち、周辺器物の描写を伴う南北

朝時代の作例として評価される。同じ祖本を有する鎌倉時代後期以降の類例のうち特に香雪本との共通性がみられ、その詳細な背景の描写は童形の聖徳太子像の展開や意義を検討するうえで重要である。また、背屏に描かれる画中画の水墨山水図は南北朝時代に描かれた初期水墨画の一例であり、本図は仏画と水墨画の双方の面で、美術史的な視点から注目される。加えて、延宝5年(1677)に石川総良が表具を寄進したという墨書は、近世における河内地方の地域史を検討する上でも意義深い。以上の理由から、本像は大阪府指定文化財にふさわしい。

[註]

- (1) これらの図様検討は現状では視認しづらいところがあるが、赤外線写真で明らかになる。なお、香雪本では2頭の猿猴を描くが、本図にはみられない。
- (2) 本図は三菱財団文化財保存修復事業助成をうけ、令和4年10月1日より令和6年9月30日までの二ヶ年事業として、株式会社修美による保存修理が行われた。この際に表具を新調しており、墨書を伴う旧表具については別置保管としている。
- (3) 幸字を有する絵仏師については郷司泰仁「二つの聖徳太子像：香雪本と弘川寺本」(『香雪美術館研究紀要』3号 2020)によれば次のとおりである。幸玄・幸俊は建久5年(1194)東大寺南中門の二天像の彩色に加わった寺家絵仏師の中にみえる。幸円は建久7年(1196)興福寺東金堂「維摩居士坐像」の彩色を担当。ほか、貞永元年(1232)興福寺「十大弟子立像」「八部衆立像」の修復彩色を行った幸賀・幸賢・幸林、建長元年(1249)に西大寺「釈迦如来立像」の彩色を担当した幸実、文永8年(1271)に唐招提寺「行基菩薩像」を担当した幸守などが挙げられる。
- (4) 前掲註3、郷司論文の紹介するところによれば、石川総良については『寛政重修諸家譜』卷一一九に詳しく述べられる。同史料によれば石川総良は万治3年(1660)に従五位下若狭守に叙されており、銘文に記される肩書と一致する。なお、石川総良は本図の表具の寄進の3年後に現千早赤坂村の五輪塔(楠木正儀の墓として知られる)前に石灯籠を寄進していることも知られている。
- (5) 前掲註3、郷司論文。
- (6) 柄香炉を執る像容に太子の年齢を当てはめた早期の記述としては、乾元2年(1303)造立の浄土寺像について嘉元4年(1306)の「じょうししょうきしょうもん定證起請文」に「聖徳太子十六歳御躰」と記す。文保元年(1317)頃の成立とされる『文保本太子伝』には、十六歳の太子を「十六歳御影、人奉名孝養御影」と記し、十六歳像をすなわち孝養像とする。ほうくう橘寺の法空が鎌倉末期に撰述した『上宮太子拾遺記』第二所収の太子十六歳条では、太子の父である用明天皇の病に際して、太子が香炉を捧げた逸話が記され、「十六歳御影」がこの逸話に則した像容であるとする。
- (7) 以下の検討は『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』(大阪市立美術館 1992)、『聖徳太子 時空をつなぐ物語』(中之島香雪美術館 2020)、前掲註3郷司論文を主に参照した。
- (8) 『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』(大阪市立美術館 1992)
- (9) 垂髪太子像に関する指摘は『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』、神像の安置形式との類似は『聖徳太子 時空をつなぐ物語』(中之島香雪美術館 2020)、南宋の祖師像との類似については『聖徳太子 日出処の天子』(大阪市立美術館 2021)にて提起される。
- (10) 前掲註2、株式会社修美による本紙構造の調査によれば、一寸四方のうち、経は「一四中七〇枚二ツ入」、緯は「二一中二本一二〇横」とする。

[参考文献]

- 天野信治「袈裟と横被の着用からみた聖徳太子孝養像」『聖徳太子信仰の美術』東方出版 1996
- 石田茂作『聖徳太子尊像聚成』 1976
- 泉武夫『古代中世絵絹集成—基底材の美術史』中央公論美術出版 2022 内田吉哉「聖徳太子孝養像の系譜: 柄香炉と笏を持つ様式の作品に関する考察」『史泉』89号 1999 大阪市立美術館『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』 1992
- 大阪市立美術館『聖徳太子 日出処の天子』 2021
- 郷司泰仁「二つの聖徳太子像：香雪本と弘川寺本」『香雪美術館研究紀要』3号 2020
- 津田徹英「中世における聖徳太子図像の受容とその意義」『密教図像』16号 1997
- 津田徹英「中世における聖なるかたちとしての童子形聖徳太子像とその機能」『日本における宗教テキストの諸位相と統辞法(第四回国際研究集会報告書)』名古屋大学大学院文学研究科 2009
- 東京都美術館『聖徳太子展』 2001
- 中之島香雪美術館『聖徳太子 時空をつなぐ物語』 2020
- 藤岡穰「聖徳太子孝養像の成立と展開—彫刻を中心に—」『聖徳太子信仰の美術』東方出版 1996



図1 全体
株式会社修美撮影



图2 面部



图3 下半身部

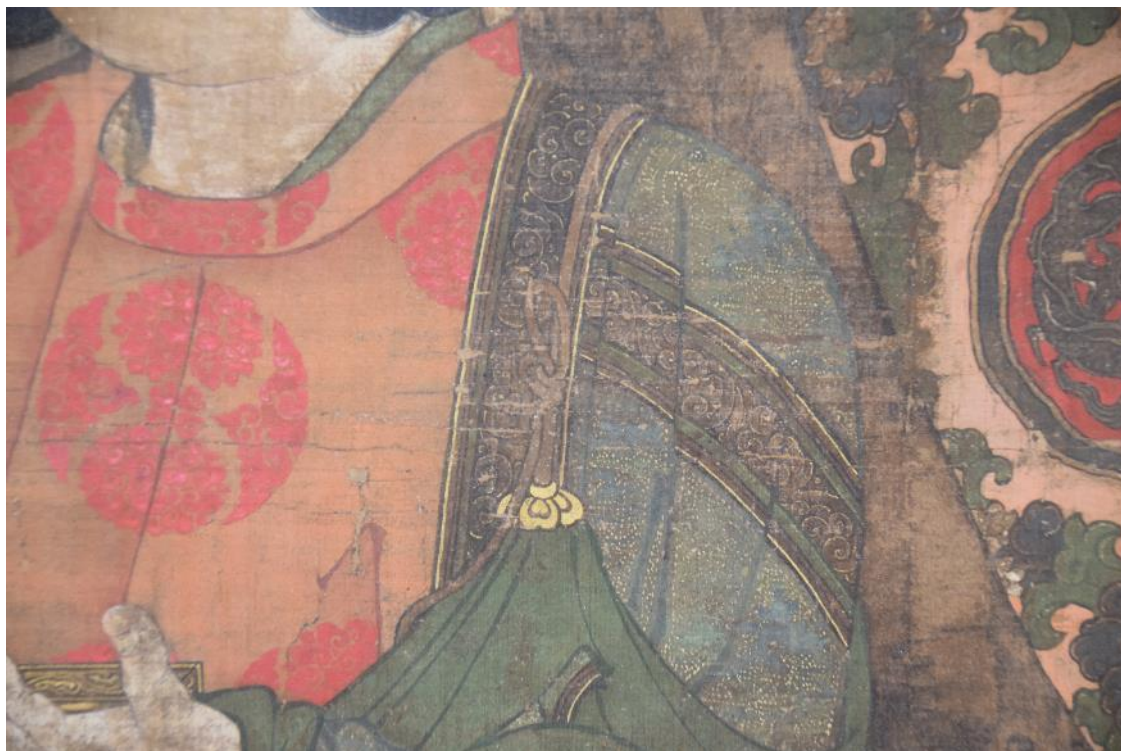


図4 着衣文様



図5 褥



图6 幔幕

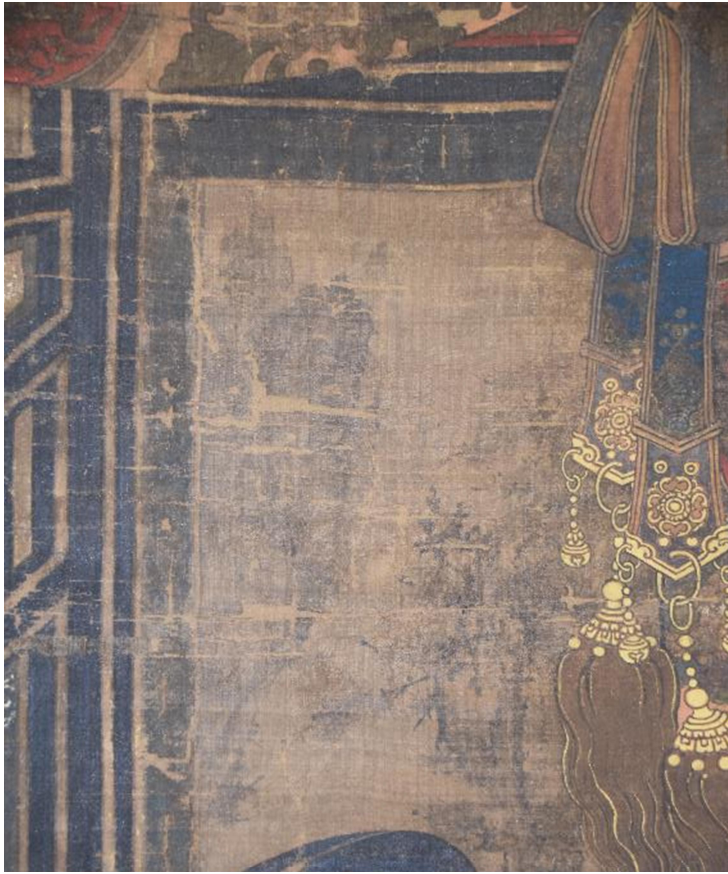


图7 背屏山水图

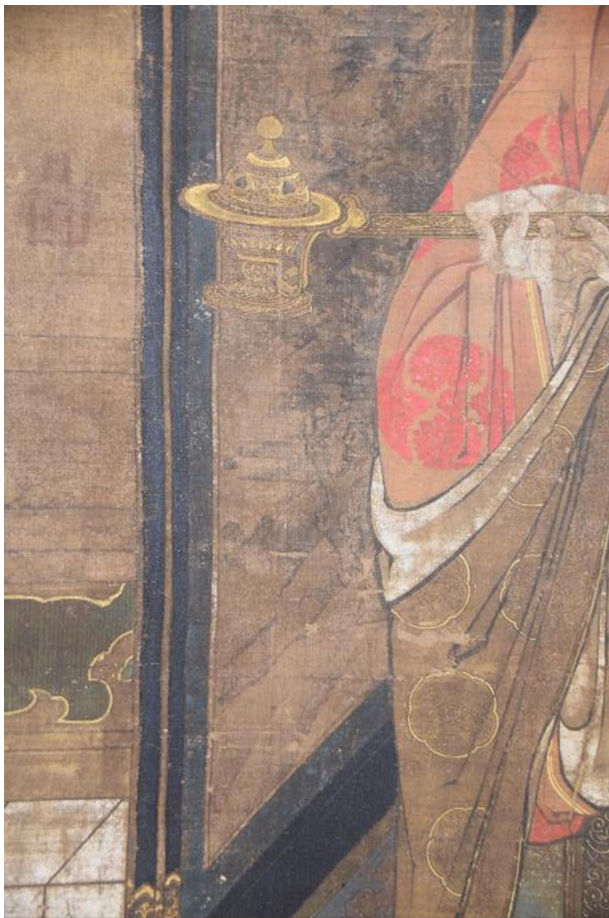


图8 背屏山水图